

写真で振り返る多里地域クロム鉱山

＜松本 一郎¹⁾・山根 俊夫²⁾・船越 博之³⁾・鳥取県日南町企画課⁴⁾・多里の鉱山を語り継ぐ会¹⁾＞

鳥取県日南町の多里地域は、日本で最初にクロム鉱床が発見された地域であり、若松鉱山、広瀬鉱山、及び日野上鉱山が存在しました。発見されたのは、1890年代の後半(明治20年代)と伝えられています。その中でも若松鉱山はクロム産出量で日本一を誇り、金属鉱山の大部分が昭和の時代に閉山や休山に追い込まれる中で、1996年(平成8年)まで鉱石を産出し続けた実績があります。

その若松鉱山を中心とした多里地域のクロム鉱山群が、平成20年度の経済産業省の近代化産業遺産に選出されました。ここでは、日本の近代化に貢献した産業群の一つとしての多里地域クロム鉱山を写真で振り返ります。



写真1.

平成20年度経済産業省「近代化産業遺産群続33」に認定され、大阪市中央公会堂にて認証状とプレートの交付が行われた(平成21年2月23日)。写真中央が船越博之社長(日本クローム工業株式会社)とご夫人(中央右)、写真中央左が矢田治美日南町長。



写真2.

写真1に同じ。「近代化産業遺産群続33」の認定証の授与の様子。写真右が矢田治美日南町長、その右(後ろ)に船越博之社長(日本クローム工業株式会社)とご夫人。

1) 島根大学 教育学部

2) 多里の鉱山を語り継ぐ会代表：元若松鉱山勤務

3) 日本クローム工業株式会社 代表取締役社長

4) 鳥取県 日南町企画課



写真3.
1970年代(昭和50年頃)の若松鉱山施設の
全景。



写真4.
索道が完成して運転を始める日に社長が来山された時の写真。前
列中央が日本クローム工業初代社長船越作一郎氏。囲む人達は当
時の係員。後ろの鉄塔は架空索道(本文中の見積五百五拾万円
余のあれである)。1955年頃。



写真5. 写真4と同日の写真。七号貯鉱場にて船越社長(前列中
央)を囲んで。足下をご覧あれ、地下足袋にゲートルを
巻いた人もいる。向こうに見える建物は現場事務所で、
1996年の休山まで現役で使用され、現在もそのまま残
っている。



写真6. 無災害記録30万時間達成を喜ぶ従業員。後ろの自動車
は若松鉱山の通勤バスである(1959年(昭和34年2月23
日達成))。



写真7.
明治の終わり頃の鉱石を運搬する写真。鉱石が大量に生産されるようになり、人の背から馬により運搬されるようになった。鉱石を麓の運送店まで運ぶ駄馬の行列である。現在も鉱山の区域内には馬道と称する道筋が残っている。

写真8.
クロム鉱石の運送店の写真。齋藤運送店の看板がみえる。^{かます} 吠に鉱石を入れて秤量、そして大八車で搬出される(1905年(明治38年)頃)。



写真9. 若松鉱山第七号露天掘場(1931年(昭和6年)頃)。



写真10. 昭和の初め頃の写真。輸送は、大八車から馬車へ、そして自動車へと変わっていった。これで輸送も随分と楽になったであろう。これで鉱石を国鉄生山駅(伯備線)まで運んだ。

若松鉱山直営記念祝賀会



写真11.
1908年(明治41年)の若松鉱山直営記念祝賀会の写真。前から2列目左端が若松鉱山のクロム鉱発見者といわれる松尾鶴太郎氏。同列左端より8人目の人(黒い服の人)が弓削田千吉氏。

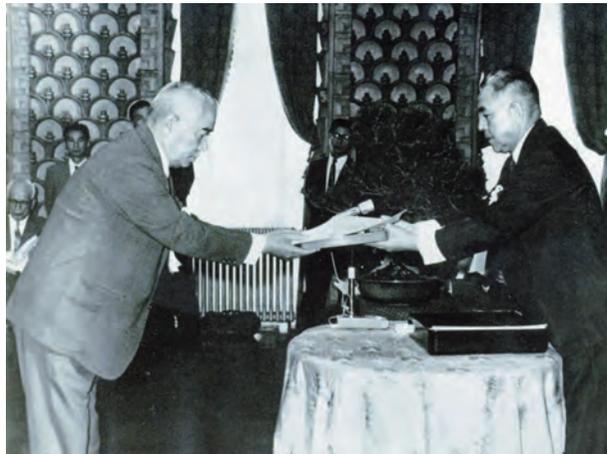


写真12. 昭和42年の内閣総理大臣表彰授与式の様子。長年の無災害を表彰されたものである。右は内閣総理大臣佐藤栄作氏、左は若松鉱山所長の野坂常雄氏。



写真13. 写真12に同じ。内閣総理大臣からの表彰状。



写真14.
無災害記録・30万時間達成(従業員延べ稼働時間)を祝しての写真(昭和34年撮影)。写真中央が鉱山所長の野坂常雄氏。周囲を囲むのは当時の保安係員の面々、この後も、80万時間、110万時間と無災害記録を更新し、写真12及び写真13に示したような表彰(昭和42年)へといざなされた。



写真15. 昭和40年代の写真. 社会科見学の一環で若松鉱山施設を訪問する多里小学校の児童たち.



写真16. 若松鉱山の採掘切羽の施作作業風景. トップスライシング採掘法と呼ばれるもので, 若松鉱山ではこの方法がメインであった(昭和60年頃の写真).



写真17. 若松鉱山のテーブル選鉱機(比重選鉱機, ウィルフレーターブル)の写真. ほぼ現在の風景であり, 選鉱機の上にはクロム鉄鉱が生々しく残存している様子が伺える.



写真18. 若松鉱山の自家発電(ディーゼル)装置(180H, 150KVA)の写真. 1957年設置. 現在もほぼそのまま残っている. 昭和60年頃.



写真19. 若松鉱山の手選鉱場. 小塊鉱の選別作業の様子. 昭和50年頃.



写真20. 広瀬鉱山の選鉱場. ベルトコンベアで流れてくる鉱石を, やはり手作業で選別している様子. この日, 若松鉱山から見学に行った時の写真. 昭和50年頃.



写真21. 機械選鉱場の写真。ほぼ現在の状況。比重選鉱機（ハルツジガー）11基が稼働していた。ここにも昨日まで稼働していたかのごとく機械の中に鉱石がそのまま残っている。



写真22. 現場事務所内部の写真。休山後の2007年の写真。ここも、茶碗や書類が残存し、休山少し前の事務所の様子が伺い知れる。



写真23. バッテリーロコ(2t)による鉱石の搬出風景(昭和60年頃)。現場事務所横の中部坑々口(標高773m)。坑口付近には沢山の支保用の坑木や矢木が積み上げられている。



写真24. 坑内ボーリングの様子。昭和60年頃。クロム鉱山では、坑道にて丹念なボーリング調査によって、新たな鉱床や既存鉱床の連続を調べていた。ボディフォーム型クロム鉱床のボディとは、芋状もしくははさや状の形を表す。つまり、蛇紋岩中に突如として出現するクロム鉱床に対して、このような坑道でのボーリング調査が探鉱にとっては重要であった。

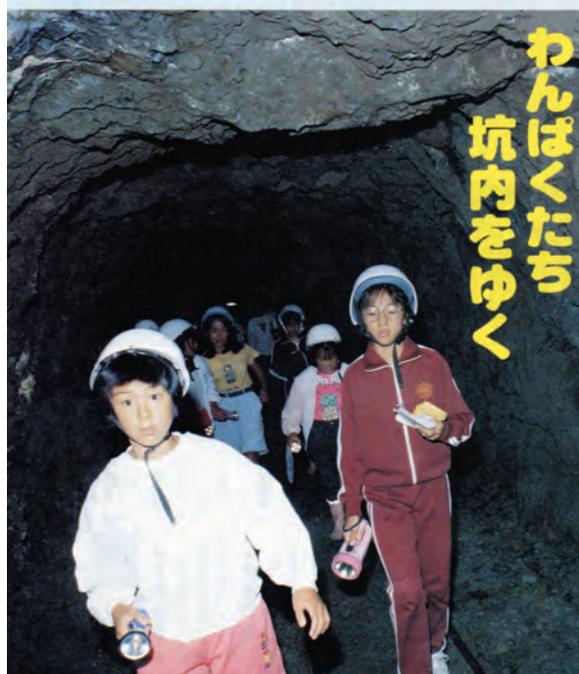


写真25. 広報誌「にちなん」の表紙。1993年(平成5年)の鳥取県日南町の子どもの若松鉱山見学の様子が表紙写真を飾っている。いつの時代も、鉱山施設は地域の社会科見学の場所として活用されていたことがわかる。



写真26. 希少金属鉱物資源の賦存状況調査「道後山地域」(平成5年度)で掘削した若松鉱山鉱区内ボーリングコアの検討会のメンバー(平成6年初頭, 若松鉱山にて撮影)。前列右から2人目が, 同検討委員会委員長の平野英夫氏(地質調査所), 後列右から4人目が金沢大学の荒井章司先生, 同右から5人目が岡山大学の加瀬克雄先生, 前列右から4人目が広島大学の鈴木盛久先生(現比治山大学), 後列右端が山根俊夫(現多里の鉱山を語り継ぐ会), 前列右端が松本一郎(現島根大学)。囲む方々は金属鉱業事業団とその関連機関の職員・調査員。



写真27. 写真26に同じ。ダナイトとハルツパーガイトの境界付近を説明・指さす荒井先生(写真右下), 説明に聞き入る鈴木先生(写真左上), 加瀬先生(写真右上), 松本(写真左下)。



(1)



(2)

写真30. 蛇紋岩化したかんらん岩の写真。(1)ハルツパーガイトの岩塊。写真のように表面が風化すると, 初生岩石の識別がしやすくなる。淡褐色でスムーズな表面の部分が初生かんらん石が変質した部分で, 黒色に一部白色の光沢のみえる部分が, 輝石類が変質した部分。特に輝石類の変質した部分には, 二次的な滑石, かんらん石, 輝石類, 角閃石類, 等が生じていることが多い。(2)ダナイトの岩塊。写真のように表面の風化した部分はほぼ一様に淡褐色でスムーズな岩相を呈する。



写真28. 希少金属鉱物資源の賦存状況調査「道後山地域」(平成4年度)の検討会の風景(平成5年度初頭, 岡山県新見市にて)。平成4年度に精査された超マフィック岩体の岩相図とともに, ポディフォームクロミタイトの成因論の講義をする荒井先生。



写真29. クロム鉄鉱岩(クロミタイト)の写真。(1)塊状クロミタイト(若松鉱山七号鉱体)。比較的粗粒の結晶であり結晶面の光沢が特徴的である。(2)斑状クロミタイト(若松鉱山北五号鉱体)。クロムスピネルの粒状集合体(黒色部)の粒間をうめる白色の基質は強蛇紋石化したかんらん石。



写真31.
現在の若松鉱山の様子。紅葉とともに赤色の屋根が美しい選鉱場の建屋であり、産業遺産としての今後の活用が期待される(2009年10月31日撮影)。



写真32. 選鉱の詳細な様子を解説する山根俊夫(写真中央: 多里の鉱山を語り継ぐ会代表)とそれに聞き入る島根大学教育学部の学生達(写真31と同日)。現在、鉱山施設の一般の人への説明や解説をどのような形で行うと良いか、など、検討が続けられているところである。



写真33. 写真32と同様に、テーブル選鉱機(比重選鉱機、ウィルフレートーブル)の解説をする山根(写真右端)。



写真34.
若松鉱山のクロミタイト、ダナイト及びハルツバータイトの岩石学的な特徴を説明する松本一郎(島根大学)(写真32, 33と同日)。後ろの建屋は現場事務所。岩石や鉱床の成因や地域の地質の特徴など、鉱山施設とともに解説することで、小学生～大学生(一般)まで幅広い世代の理科学習と社会科学習に繋げることが重要である。